

子育てという営みについて

精神分析的療法家としての経験から、考える

中村学園大学短期大学部 山崎 篤

まず

1. 話題提供者の私が、精神分析を代表しているわけではない。
2. 企画者としてこのタイトルに決めた時から、対話が始まってしまった。
3. 今日のこの子育てについての話は、私なりにシステム論と対話してきた結果として思いついたことである可能性があります。
4. 最近、世の中の色々なことが、「システム論っぽい」と見えてしまう。　おおっと。

次に

1. 「理論的には間違っているけど、臨床的にはそうするしかないじゃん」と常々思う。
2. 想定外のことは聞こえないし、見えないことが多いと思う。
3. 聞きたいことばかり聞いて、見てもいいことばかり見てたら、考えと行為は硬直化していく。
4. 子育ては、直線的因果論になじまないことが多いと思う。

そして、子育てという営みについて気になっていること

1. 子育てって、養育者と子どもとの相互交流だと思う。
2. 「これが正しい」という人には気を付けた方がいいと思う。
3. 子どもが相手だと、想定外のことが起こる。
4. 想定外のことを無視したり、想定内に押し込めようとしたら、子どもとして悲しい。
5. Bestを目指したくなるから、敢えてgood enoughで、と言いたいです。

子育てという営み

子ども ↔ 養育者

子ども: 養育者に何かをしてほしいと願い、働きかける。

(養育者は、それに応える。応えないことも)

養育者: 子どもに何かをしてあげたいと願い、働きかける。

(子どもは、それに応える。応えないことも)

* この働きかけと反応が瞬時に起こるかも。(交叉性)

[働きかけ (Action) → 反応 (Reaction)] → [A → R] → A → という連鎖

$[A \rightarrow R] \rightarrow [A+1 \rightarrow R+1] \rightarrow [A+2 \rightarrow R+2] \rightarrow \dots [A+n \rightarrow R+n] \dots$

連鎖だが、必ずしも、 $A+n$ と $R+n$ は直接関連しているとは限らない。
直接的因果関係は、成り立たないかもしれない。
反応が次の働きかけを引き出すこともあるし。
お互いのAやRに、気づかないこともある。

子育てという営みで起こる想定外について

1. 子ども→養育者

*子どもの思いはわかり易いものとは限らない。分かりにくい可能性もある。

*思いは、選択的に読み取られる。

また、養育者は読み損なうかもしれないし、読み落とすかもしれない。

2. 養育者→子ども

*ねらいをもって関わる。でも、ねらい通りの反応があるとは限らない。

ねらいが適正とは限らない。ねらい通りに働きかけられないこともある

想定外のことに對して

1. 想定外のことに氣付かないで、スルーする
(無意識には氣付いていて、違和感が残ることがある)
2. びっくりして戸惑う。
3. 想定外だったことまで想定する、新しいワーキングモデルへと修正する。
4. 相手に想定内に留まるようにと、強要する。
* 養育者から子どもへ、子どもから養育者へと双方向で起こる。

あらためて。子どもと養育者との間には、ズレが起こること

1. (子ども) = (養育者) ではないので、必ずズレは生じる。
2. できるだけズレ度が少ない方がいいし、あったとしても「決定的」ではない方がいい。
3. 応答的な対応: 「母性的没頭 (maternal preoccupation)」
(ウィニコット)

ズレがあっても、働きかけを修正したり、工夫したりすればいい。
その積み重ねが子育てという営みではないか。(私見です)

正しさへのこだわりやとらわれ

子育てでは、できるだけベストを尽くしたいものです。

とはいえ、ベスト＝正しさにこだわりすぎると、想定外のことに対応しきれたり、正しくないことに不寛容になるかもしれません。



子育てという営みが硬直化していく可能性があります。

不寛容な態度は、子ども ⇔ 養育者という対話を損なうかもしれません。

ウィニコットに、学ぶ

1. 抱え続けること (holding) やコンテインし続けること (containing) とは、抱え損なったり、コンテインし損なったりしながら、それにひるまず、希望をもって、抱え続けようとし続けること、コンテインし続けることかもしれません。
2. ベストを目指すにしても、頑張りすぎず、想定外のことやズレは必ずあるので、Good enough(ほぼ、良い) で良いのでは。

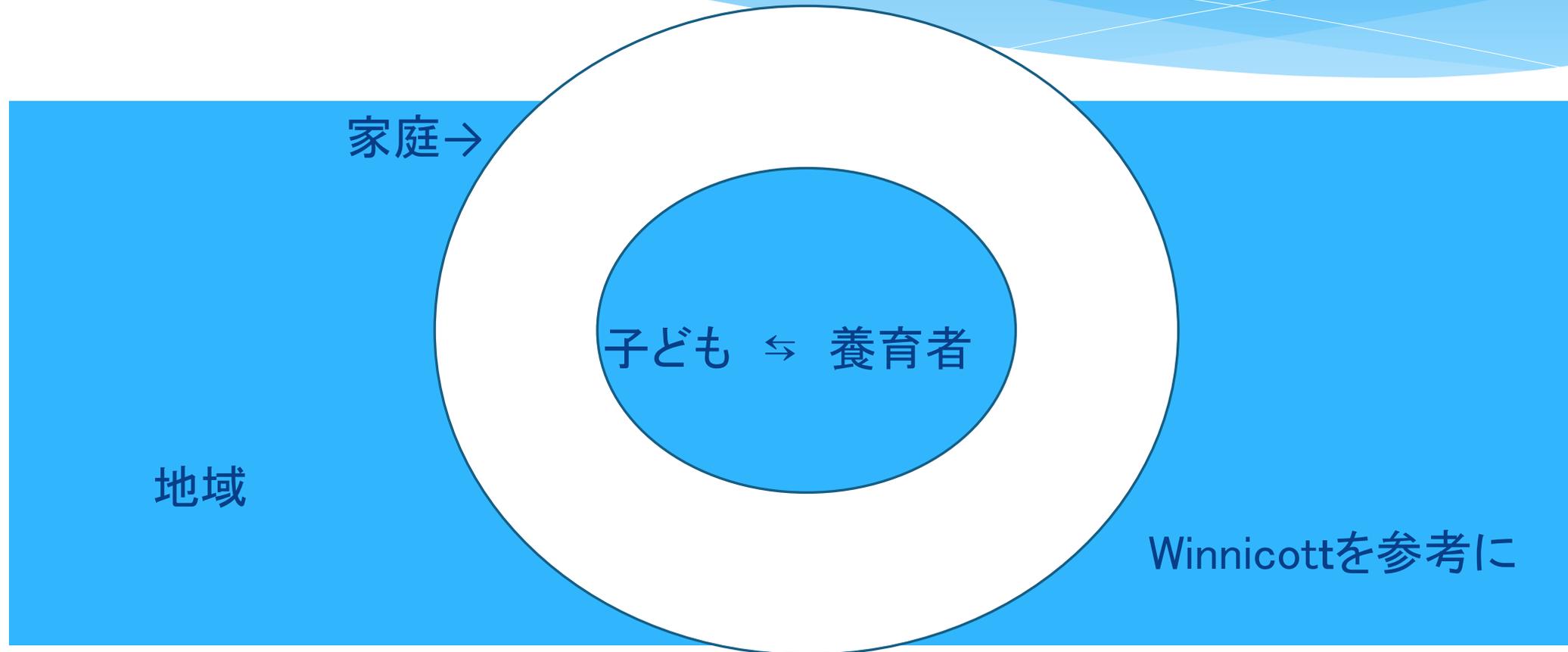
万能感的こだわり、や、自己愛的とらわれ、という観点から

1. こだわりやとらわれがあると、ものがその通りには見えなくなる。
2. こだわった働きかけは、そのこだわりに応じた反応を期待したくなる。
3. 特定の考えにとらわれてしまうと、それ以外のことを否定したくなる。
4. ベストを目指すと、完璧な結果が得られるという幻想。

個人、家族、地域の協働について

1. 子育てに関して言うと、養育者が一人きりだと、bestにこだわったり、とらわれたりしやすい。
2. 時々、二者関係が外に向けて開かれることが望ましい。
3. 取りあえずは、保育者をはじめとする子育て支援のシステムを利用してはどうだろうか。

子ども ⇄ 養育者 を取り巻く発達促進的環境



西出先生の話題提供を受けて

1. 相補的かどうか分かりませんが、お互いに参考にすると有益なことはたくさんありそうに思います。
2. 円環論的発想に関心をもっています。
3. 自分が依って立つ理論を大事にしながらも、閉じ込められてしまわないようにと考えています。
4. Winnicottの発達促進的環境に関するアイデアは、システム論の観点からみると、整理されるように感じています。

事前に西村先生、鴨澤先生のスライドを拝見して

1. お二方の実践について、「特定の体験を提供する」臨床なのかなあと感じました。
2. その点にこだわると、精神分析ではネガティブな体験にも開かれていると言えるかもしれません。(見たくない感情だからこそ)
3. 西村先生の事例のサトシ君のお母さんのお力になれば、と思いました。
4. 鴨澤先生から伺った「文脈が変われば、体験が変わる」というお話は、新鮮に感じたところです。

さらに、もう一つだけ

1. 神経症圏の成人を対象とする精神分析的療法では、なるべく協働しないこと、を前提としています。
2. 「心的現実」や「幻想」を重視する考えからだと思います。
3. 基本的に、家族、地域に向けた、現実への介入は行いません。
4. この点に関して、セラピーの対象とする人が拡大されていく中で、母子並行面接(子ども)や病棟ミーティング(?)等が開発されていった経緯があるのだと考えています。

あらためて、子育てという営みについて

1. 子育てという営み：子ども ⇔ 養育者
2. 相手のあることだから、ねらい通りにはいかないこともある。
完璧さや正しさにこだわらない方がよいかも。
3. その意味で、good enoughで、いかがでしょうか。
(大切な子どもだから、当然bestを目指したくなるものですが)

ご清聴ありがとうございました。

不寛容な時代かも知れません。

そんな時代だからこそ、対話し続けることが必要かとも思います。

「水と油だから」と考えることを止めてしまっっては、もったいないよと
いうのが、私の感想です。